

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21720001

研究課題名（和文） ルヌーヴィエの実践哲学の構造とフランス自由主義の哲学

研究課題名（英文） The structure of the practical philosophy of Charles Renouvier and the philosophy of French liberalism

研究代表者

村松 正隆 (MURAMATSU MASATAKA)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：70348168

研究成果の概要（和文）：

本研究は、19 世紀フランスの哲学者シャルル・ルヌーヴィエ (Charles Renouvier, 1815~1903) の実践哲学の構造を明らかにし、また、その思想史上の意義を明らかにすることを目指した。日本では十分に知られていないルヌーヴィエであるが、人間の哲学的自由ならびに政治的自由を根底に置くその哲学は、フランス第三共和制の成立に、理論面から多きな寄与を与えたこと、ならびに、カント哲学のフランスへの流入とその改変において、大きな功績を果たしたことが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：

This research project has tried to clarify the structure of the practical philosophy of Charles Renouvier (1815~1903) and its significance in the history of ideas. It has made been clear that, though Renouvier's philosophy is not well known, his philosophy which has clarified the significance of the philosophical and political liberty of the human being, contributed to the stabilization of the French 3rd Republic and to the introduction of Kantian philosophy into France.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：近現代フランス哲学・倫理学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：シャルル・ルヌーヴィエ、フランス自由主義、フランス・エピステモロジー、実証主義、確率論、オーギュスト・コント、メヌ・ド・ビラン

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、独自の心身論を唱え、心身関係のあり方から人間悟性の諸カテゴリーを導出するという理論を展開したメヌ・

ド・ビラン(Maine de Biran)の研究に取り組み、その後、ビランを祖とするフランス・スピリチュアリズムの展開を、ヴィクトール・クザン(Victor Cousin)、フェリックス・ラヴェッソン(Félix Ravaisson)、アンリ・ベルク

ソン(Henri Bergson)といった哲学者の研究と通じて明らかにしてきた。さらに具体的に言えば、研究代表者は次のような事態を明らかにしてきた。

(1) 因果性カテゴリーを正当化するという文脈の中で心身関係の構造を緻密に記述するという枠組みの中で開始されたビラニスムの発想が、ヴィクトール・クザンによって、7月王政の正当化という文脈の中で、外的事実還元し尽くすことのできない道徳的諸価値の正当化、という性質を強く帯び始めること

(2) ヴィクトール・クザンの議論の中で抹消された自然哲学的な可能性をフェリックス・ラヴェッソンが新たに引き上げなおし、自然と神の概念の微妙な重ねあわせを背景にしつつ、そうした自然哲学からキリスト教的な倫理学を引き出したこと

そうした研究の展開中で、フランス・スピリチュアリズムの展開を内在的に理解するだけでなく、その歴史的地位、社会的意義についても考察する必要性を痛感するようになった。特に、7月王政期ならびに第三共和制期の哲学の展開は、同時代の政治状況との突合せを抜きにしては十全な理解はできないことを痛感するようになった。結果、研究代表者は、フランス・スピリチュアリズムの展開を、実証主義や社会学との対比の中で明らかにするという作業に取り組むようになった。特に、個人というものを認識論的な基礎とすることにこだわるスピリチュアリズムの姿勢は、社会的事実(ないし、共同体のあり方)を出発点とする実証主義や社会学との対比の中でこそ、その可能性を明らかにすると思われ、両者の認識論的基盤の比較の重要性が明らかとなった。そうした過程で次第に、フランス第三共和制の基礎となる哲学を構築したとされながらも、現在不当に忘れ去られているとあってよい、シャルル・ルヌーヴィエ(Charles Renouvier)の哲学の重要性に気づくに至り、現代日本におけるルヌーヴィエへの注意が不当に低いことにも鑑みて、彼の哲学の内的構造ならびに社会的意義を研究することを志した(ルヌーヴィエのみを対象とした研究ではないが、第三共和制成立前後の自由主義的哲学の紹介ならびに分析としては、日本語のものでも、北垣徹氏の『一連の論考や田中拓道氏の『貧困と共和国』(2006年)などがあつた。しかし、これらはいわば社会学的な立場からの研究であり、学科としての哲学の側からの応答は今のところほぼ皆無というのが実情であつた)。

少なからぬ研究者に、「第三共和制の基盤を作った」と評価され、哲学者のみならず、デュルケムをはじめとした社会学者たちに

も深い影響を与えたルヌーヴィエの哲学を明らかにすることは、19世紀のフランス哲学の展開を歴史的に理解し、かつそこから現代的な意義を引き出すためにも、必須の作業であることが明らかとなったのである。

## 2. 研究の目的

本研究は、19世紀フランスの自由主義の哲学者、シャルル・ルヌーヴィエ(Charles Renouvier)に焦点をあて、その哲学の内的構造を明らかにすると同時に、同時代の政治思想や歴史的状況との対比を行いつつ研究することを目的とした。

具体的には、彼の認識論の内的構造を明らかにし、特にその無限否定の議論とカントのアンチノミーを否定する議論がどのような内的連関にあるのか、また、彼のカテゴリー論が、19世紀フランスにおけるエピステモロジーの展開の中でどのように位置づけられるかを明らかにすることが、研究の一つの柱となった。

また、自由を絶対的な基礎に据える彼の実践哲学と道徳論の内的構造を、その、認識論との連関から明らかにすることも重要な作業の一つとなった。特に、カントのアンチノミー論の吟味を通じて自由概念が「要請」としてではなく「実証的な事実」として正当化される論理を明らかにすることが、大きな目的となった。

こうした作業は、ルヌーヴィエの哲学をカント哲学のフランスへの流入の中に位置づけ、また、彼をカントとデュルケムの間で適切に位置づけることにもつながるものであつた。

またこの研究を通じて、共和政確立期のフランスにおける、哲学と政治との関係を考察することが大きな目的となる。特に彼の倫理思想に焦点をあて、哲学が政治・教育にいかなる形で貢献することが出来るのか、そのモデルケースを、ルヌーヴィエを手がかりに考察することが、目的の一つであつた。

## 3. 研究の方法

実際の研究を遂行するに当たっては、研究の方向性についての工夫、ならびに方法論上の工夫のそれぞれについて、次の工夫をはかることとした

### (1) 研究の方向性の工夫

#### ① 同時代の諸潮流との比較

ルヌーヴィエの思想の特質を明らかにするためには、同時代の諸思想との比較が必要になる。成熟期のルヌーヴィエの思考の分析の難しさは、彼がフランス・スピリチュアリ

スムや実証主義から多くの養分を得ている点にあった。このことを別の側面から見れば、彼独自の思想と、彼が他の思想家から受け継いだ部分との区別が極めて困難である、ということにもつながる。しかしこの事態を積極的に捉えれば、これらルヌーヴィエに影響を与えた諸思想との注意深い比較こそが、彼の哲学の独自性を明らかにすることを意味している。研究代表者はこれまでの19世紀フランス哲学研究で得た知見との比較を積極的に行い、これを通じてルヌーヴィエの独自性をより明確にすることを方法の一つとした

## ② カント主義の理解と専門家によるチェック

長い蓄積を持つカント倫理学研究についての知識が本研究においては不可欠であった。応募者のカント理解、ならびに19世紀フランスにおけるカント理解に対する、現代のカント研究の水準からの評価を知るためには、カント倫理学研究者との交流が欠かせない。研究代表者の研究機関は幸いカント実践哲学を専門とする研究者が二人おり、これらの専門家に教えを仰ぐことで、研究に対する客観性を担保することを、重要な方法の一つとした。

## (2) 研究の方法論上の工夫

### ① e-text の活用

本研究では、ルヌーヴィエのテキストの読解が基本的な作業となった。もちろん基本的な読解作業は不可欠であるが、他方で、膨大な量の著作を有効に分析するためには、ルヌーヴィエのテキストのうち電子化されているものを有効に用いることも必要になる。研究代表者は“La science de la morale”などのe-textを入手し、基礎資料作成に活用した。

### ② 同時代の雑誌資料の積極的活用

19世紀後半のフランスにおいては、哲学関係の雑誌が大量に発刊されるようになるが、ルヌーヴィエその中で、*Critique Philosophique* という雑誌を、1872年から1885年にかけて公刊している。この雑誌はルヌーヴィエの哲学思想を明らかにするだけでなく、彼の同時代の諸問題への論評をも含んでいる。これらを積極的に活用することで、ルヌーヴィエの哲学の実社会への影響について一定の知見を得ることが出来るだろうと考えた。この雑誌は幸い、研究代表者の居住地の近隣にある小樽商科大学と書簡手塚文庫にすべて所蔵されており、これらの資料を有効に活用することも、当然ながら、重要

な方法の一つとした。

## 4. 研究成果

本研究においては、まず、ルヌーヴィエの理論哲学研究においては、特にその因果論に注目し、カント主義との差異にも注目しつつ、ルヌーヴィエの因果論の射程を明らかにすることを試みた。また、こうした認識論研究の枠組みの中で、ルヌーヴィエの哲学を、カントとデュルケムの中に適切に位置づけることができた。具体的には、超越論的統覚とカテゴリーを関係付けるカントの議論構成から、カテゴリーの根拠を共同生活（「超越論的共同性」と名づけることもできるだろう）に求めるデュルケムの議論に移行する垂目には、ルヌーヴィエのカテゴリー論という媒介が必要だったことが明らかにされたのである。

また、実践哲学の研究においては、その道徳論の研究を進め、彼の「防御権」に注目することで一定の研究を進めると同時に、彼の道徳哲学の特徴を表わすいくつかの雑誌論文の翻訳を行った。

また、自らの哲学的方法論を構築するにあたってルヌーヴィエのアンチノミー論を参考にした、ジャン・ヴァール (Jean Wahl) の諸著作の読解に積極的に取り組み、日本語では十分に紹介されていないジャン・ヴァールの哲学の概括的な紹介を行い、ルヌーヴィエの議論の展開の可能性の一端を明らかにした。

また、モンペリエ大学図書館ルヌーヴィエ文庫に納められているルヌーヴィエ宛の書簡を読解した。この文庫には、ルイ・リアール (Louis Liard) やガブリエル・タルド (Gabriel Tarde) といった、19世紀末のフランスの多くの知識人がルヌーヴィエに宛てた手紙が収められており、当時の知的風土、ならびにルヌーヴィエが勝ち得ていた名声を明らかにすることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 村松正隆、「ジャン・ヴァールの方法 — その「相補性」を巡って」、『哲学年報』、査読無、第58号、2012年、1～17頁
- ② 村松正隆、「シャルル・ルヌーヴィエ — カントとデュルケムの間で—」、『創文』、査読無、No. 526、2009年、12～15頁

〔学会発表〕（計3件）

- ① 村松正隆、「生理学に触れるメーヌ・ド・ビラン」、UTCP, 2011年7月29日（東京大学駒場キャンパス（東京都目黒区））
- ② 村松正隆、「ジャン・ヴァールの方法—その「相補性」を巡って」、北海道哲学会、2010年12月11日、北海道大学（札幌市）
- ③ 村松正隆、「シャルル・ルヌーヴィエとそのカテゴリー論」、北海道哲学会、2009年12月12日（札幌市）

〔図書〕（計2件）

- ① 村松正隆、東信堂、『哲学への誘い I 哲学の立ち位置』（松永澄夫、鈴木泉編）、2010年10月10日、138～181頁（「哲学とイデオロギー」を執筆）
- ② 村松正隆、勁草書房、『哲学という地図 松永哲学を読む』（檜垣立哉、村瀬鋼編）、2010年、135～171頁（「物の間の因果」と「人の間の因果」を執筆）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

村松 正隆 (MURAMATSU MASATAKA)  
北海道大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：70348168

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし